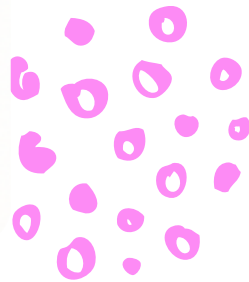


ゆりいか通信

第27号

令和8年7月



進路も出会いの一つ

七月になると、多くの高校でオープンキャンパスが開催されます。皆さんも進路について考える機会が増える時期ではないでしょうか。

わが家でも、当時は子どもの心が何に動くか分からず、いろいろな学校のパンフレットを机の上に置いたり、話題にしたりしていました。中学校をずっと休んでいる姿を見ていると、「通学型の高校は難しいのでは」と考えてしまうこともありました。

それでも、本人が少しでも興味を示したオープンキャンパスには、とりあえず申し込みました。当日、動いたら参加するというくらいの気持ちで、「子どもにご縁がありそうかどうかを占う」という感覚で見守っていました。

また、強い候補ではない学校であっても、専門学科の体験授業などへの参加を勧めることもありました。「こんな高校生活もあるんだ」「こんな学び方もあるんだ」と知ることは、子どもの視野を少し広げてくれたように思います。そうした経験を重ねるうちに、自分のやってみたいことや進んでみたい道が少しずつ

つ見えてきて、子ども達は自分のペースで歩き始めました。教員として多くの生徒を見てきた中でも、中学校にはほとんど通えなかった生徒が、高校では生き生きと通い続ける姿に何度も出会いました。子ども達の未来は、大人の予想どおりにはいかないものです。「この子には無理なのは」と思ってしまうこともあるかもしれませんが、それを元に選択肢を考えると、子ども達の可能性を狭めてしまうことにもつながりかねません。

今は本当にさまざまな高校や学びの場があります。不登校の子どもの進路を考えると、ときには、「いろいろな選択肢と出会う」ことを楽しんでいただけたらと思います。

そして学校の先生方には、不登校の子どもにはその子なりの進み方があることを心に留め、本人と保護者の思いを大切にしながら進路と一緒に考えていただければ幸いです。また、高校の選択だけにとどまらず、今後困った時に安心して相談できる居場所や支援機関も併せてご紹介していきます。

恩庄 香織

Our Activities

カリンバ体験

取材の報告

先日、カリンバ体験の取り組みに関心を持ってくださった記者の方が取材に来られました。

私自身、妹が演奏しているのを見て始めたことや、オルゴールのようなやさしく美しい音色に魅了されたこと、音楽経験がほとんどなくてもすぐに楽しめたこと、「おてがるカリンバ協会」との出会いなどをお話ししました。

また、記者の方にも実際にカリンバを体験していただき、その手軽さや音色の心地よさを感じていただく機会となりました。

カリンバは、子どもから大人まで気軽に楽しめ、人と人をつなぐ温かな楽器だと感じています。7月26日(日)の教職員・若者支援者対象カリンバ体験会や、日頃随時受け付けている親子カリンバ体験にも多くの方にご参加いただければうれしく思います。



6月勉強会の

実施報告

6月のフラツペ勉強会では、「心と身体の境界線」というタイトルで、「バウンダリー(心の境界線)」をテーマに学びました。

若者たちが安心して人とつながり、自分らしく社会の中で生きていくためには自分と相手の境界線を大切にすることが欠かせません。特に、身近な人との関係ほど境界線は曖昧になりがちですが、自分も相手も大切にするためには、適切なバウンダリーを意識することが重要です。

今回の学習会では、バウンダリーについて理解を深めるとともに、若者を支援する立場としてどのような関わりを心掛けていくべきかについて意見を交わしました。親子間の距離感やSNS上での関わり方などについて意見交流を行い、自分と相手の双方を大切に考える時間となりました。

不登校のお友だち

フォーラム開催

6月28日「不登校のお友だち」フォーラムを開催しました。教職員の先生方、若者支援に関わる皆さま、また関心を持っていた方々にご参加いただき、あたたかい雰囲気の中で学びと対話が進みました。

最初に洛和会音羽病院臨床心理士の中島陽大先生からお話をいただき、続いて「不登校のお友だちを支える」をテーマに、お友だちの立場、不登校当事者の立場、そして養護教諭経験者というそれぞれの視点から思いや経験をお話ししました。

また、交流会ではこのフォー

ラムのために考案したアクティビティを実施しました。さまざまなご意見を頂くこともでき、私たちにとって有意義なフォーラムとなりました。



Upcoming Events

7/18
(土)

♥ ゆりいかタイム

ゲームをしたりおしゃべりしたり、自由に過ごせる時間です。一人でもお友だちとでも。

7/19
(日)

◆ フラッペ勉強会・交流会

今回は、「夏休みを元気に過ごすために」がテーマです。

7/26
(日)

★ 教職員カリンバ体験会

簡単で優しい音色の楽器、カリンバに触れて、1学期の疲れを癒しませんか。

調整中
(★)

★ ゆりいか勉強会

「子どものトラウマと心理支援」をテーマに中島先生のお話をお伺いします。



ゆりいか研究会

- ★ 教職員・若者支援者対象
- ◆ 保護者・若者支援者対象
- ♥ 高校生年代の若者対象

いずれも詳細はゆりいか研究会ウェブサイトをご覧ください。

今月のコラム

鳴くよウグイス平安京

七九四年、平安京遷都の年である。東寺と西寺の間にそびえ立つ羅城門が平安京の玄関口であり、幅約八十五メートルの朱雀大路が大内裏に向かって真っ直ぐにのびていた。大内裏とは、天皇の住居である内裏を中心として、その周辺に政務や儀式を行う朝堂院や諸官庁を配した一画をいう。朱雀大路は現在の千本通りに当たり、朱雀門（現在のＪＲ二条駅の北東）から先が大内裏であった。朱雀門の北百五十メートルに応天門があり、そこから大内裏を望む風景は、八分の五の縮尺で模造された平安神宮に再現されている。

大内裏の朝堂院の北部中央にあった正殿を大極殿という。千本丸太町のすぐ近くの児童公園に「大極殿遺跡」の大きな石碑が立っている。千本丸太町の交差点に立つと、ここがかつての平安京の中心地であったのだという感慨にふけてしまう。

天子は南面す、ということでは

朱雀大路を境として、右が右京、左が左京と定められた。大内裏は、北は一条通り、南は二条通り、東は大宮通り、西は御前通りに囲まれた区域であり、現在の京都御所の約二倍の規模であった。

大内裏は『源氏物語』の舞台であり、また清少納言はこの辺りから明け行く東山を眺めて「春はあけぼの」の随筆を書いた。現在は民家やビルが建ち並んでいて東山は垣間見える程度であるが、当時はすかと見渡せたことであろう。

立派な平安京の大内裏ではあったが、度重なる火災で焼失しては再建された。そのたびに、天皇は仮住まいをされ、そこを里内裏という。一三三七年、光厳天皇が土御門東洞院殿を里内裏にされて以来、明治時代に入るまで内裏は動く事なく定着した。現在の京都御所である。

京都は天災と戦乱によって破壊と再建を繰り返してきて現在がある。中世や江戸幕末期の京

都は歴史の舞台となってよく知られるところであるけれど、開闢のころの平安京は案外知られていない。

遷都当時の復元模型と様々な展示資料物は、丸太町七本松の京都アスニー、京都市平安京創生館」で見ることができる。千二百年以上前の「鳴くよウグイス平安京」を、現在の地図を重ねて歩き、いにしえに心を馳せてみるのもおもしろい。

ゆりいか研究会

メンターボランティア

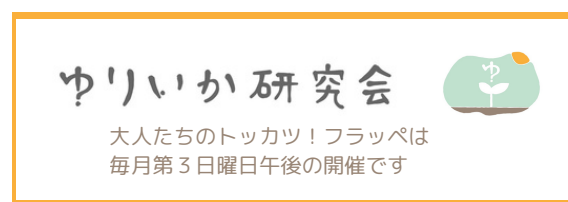
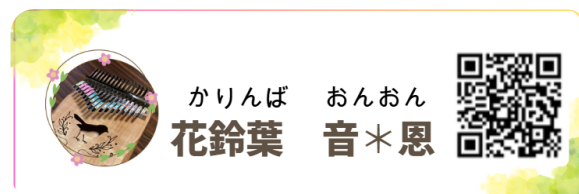
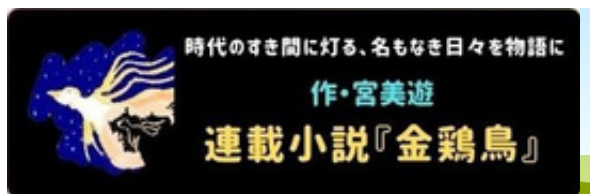
田中 博一



Thanks to

THE PEOPLE WHO WARMLY SUPPORT US

支援者の皆様（順不同）



応援おじさんさま、多喜誠子さま、杉本さま、宮坂 修平さま、T.OGAWAさま

クラウドファンディングおよびその他の形で協賛・寄付をしていただいたみなさまに心より感謝申し上げます。campfire community におきまして引き続きクラウドファンディングを受け付けております。また協賛広告や直接の寄付も受け付けております。関心をお持ちの方がいらっしゃいましたらぜひお声がけください。



「不登校のお友だち」への応援コメント

これまでに寄せられたコメントの一部をご紹介します

本当に友を救いたい、という思いがあるのなら、長い目で見れば、Aさんの人生にとっても深い学びがあると思います。だけど、自分をいちばんだいじにすることは、決して悪いことじゃない、ということも、頭の片隅においておいてね。しんどいときは、しんどいと言っていい。それはBさんもAさんもおんなじ。

その支えているという行為が、確実に、相手のためになっていると思います。

独りでがんばってしまわないで。応援、支援する仲間や先生とつながってください。

まだまだ募集しています。ぜひお一人でも多くのコメントをお待ちしています。



《連続小説》



金鶏鳥

宮美遊

少年期（五）

しばらくするとまた飛行機の機体が入混みの向こうから飛び上がるのが見えた。ひらりひらりと空を自由自在に飛び回っていたが、やがて高く上がった飛行機は急に不安定になって羽子板に打たれた羽根のようにくるくると回転しながらすーっと落ちてきた。何か不調があったのだろうか、落ちてくる飛行機を見てギヤアとみんなが目や耳を覆った。けれどしばらくするとまたエンジンの音がして飛行機が舞い上がる。そんなアト・スミス飛行士の宙返りや木の葉落し等の曲芸に人々はただ歓声をあげ、ただただ啞然（あぜん）とするばかりだ。飛行機が宙返りをするのと拍手がおこり、急旋回をするともた拍手、木の葉落しを見た人々は拍手喝采で興奮気味だった。人間が空を飛ぶのを見たのは、この辺りでは生まれて初めての人ばかりだろうと信男は思った。

その夏、弥次郎爺様は製茶店を手伝うため居を移した。

その頃信男は夜になるといつも兄の辰郎とともに、家から一キロ程離れた新橋（しんばし）へ行くことになっていた。民家から離れると灯りがなく、月明かりを頼りに夜の田んぼ道を駆け足で行く。しばらくすると暗闇の中にこんもりとした竹藪が浮かんでくる。近づく、竹藪の間に佐奈川（さながわ）にかかる橋が現れる。その橋の手前から川において水車小屋へ行くのだ。二人は、小屋の夜の当番を任されていた。

まずカンテラと呼ばれるブリキ製の石油灯に火を点けて手に提げ、水車小屋の影で薄暗い石段を降りる。それから佐奈川の堰（せき）に板を差し込んで水の流れを塞（ふさ）ぐ。すると水車小屋の中にある精米の杵（きね）の音が止まる。水の力で杵が上下して米の糠（ぬか）をとっているのだ。

この小説は、明治・大正・昭和と激動の時代を乗り切った実在の人物をモデルとした小説です。先行き不透明な現代を生きるヒントが得られるような気がします。ぜひこれからも楽しんでご一読ください。

絵：落葉画廊

編集後記

母も私も、健康のためにウォーキングをするよう医師から勧められています。しかし、この暑さではなかなか外へ出る気になりません。日よけ帽にサングラス、長手袋という完全装備で出かけようとする母を見て、熱中症が心配になり、買い物がたら大型スーパーの中を歩くことにしました。涼しく疲れれば椅子で休めるので安心です。店内を歩いていると、いろいろな商品が目に入り、思った以上によく歩けました。「これは名案」と喜んでいたので、結局は食事までしてしまい、消費カロリー以上の摂取カロリーに。健康のためには歩いたはずが、予想外の結果となりました。皆さんは、この暑い季節をどのように乗り切っておられるのでしょうか。（恩庄か）

おしらせ

★8月2日に予定していたゆりいか勉強会ですが、都合により日程を再調整することになりました。決定次第ウェブサイトにてお知らせしますので、ぜひご確認ください。

★令和8年6月号までのゆりいか通信をウェブサイトに掲載しました。関心おありの方にご紹介ください。